

害虫編

注意が必要な害虫とは!?

① アブラムシ類は 苗の時期から防除

葉裏に体長1・5mmで暗緑色や緑色のワタアブラムシが、4〜5月または9月に発生します。特に、苗の時期にアブラムシが多発すると、苗が枯れるなどの被害をおよぼすので防除が必要です。

アブラムシの飛来が多い時期には、防虫ネットをかぶせることが重要です。育苗期や定植直後に目合い1mm程度の防虫ネットでトンネルがけするとよいでしょう。また、畝面のシルバーポリマルチも有効です。毎年発生が見られる場合は、生育期にスタークル粒剤、アルバリン粒剤などを株元に施用します。薬剤が根から吸収されてアブラムシに効果

を示します。発生が多い場合にはダントツ水溶剤、アクタラ顆粒水溶剤、チエス水溶剤などをていねいに散布します。

② 葉・花蕾・果実を 暴食するハスモンヨトウ

成虫は前翅長16mm、黒褐色の蛾で、幼虫は大きくなると体長4cm、体色は灰暗緑色、暗褐色など変化に富みます。広食性でほとんどの野菜類を食害し、オクラでは葉だけでなく、花蕾や果実も好んで食害します。8〜10月に発生が多くなり、卵から孵化した幼虫は、集団で表皮を残すように葉を食べます。幼虫が大きくなると、日中は日陰や地際部などへ潜み、夜間に活動して葉を暴食します。幼虫の集団を見つけたらすぐに捕殺

します。発生が多い場合には、マトリックフロアブル、アタブロン乳剤、ゼンターリ顆粒水和剤、デルフィン顆粒

水和剤などを散布します。

③ オオタバコガは 果実に入り込んで食害

成虫は前翅長15mm、灰黄褐色の蛾で、幼虫は大きくなると体長4cm、体色は淡緑色から茶褐色まで変化に富みます。広食性でほとんどの野菜類を食害し、オクラでは葉だけでなく、花蕾や果実にも好んで食入します。発生は8〜10月に多くなります。多発する場合には、アフアーム乳剤、アタブロン乳剤、ゼンターリ顆粒水和剤、デルフィン顆粒水和剤などをていねいに散布します。

④ 葉が筒状に巻かれて
いるとワタノメイガ

成虫は前翅長15mm、淡黄色の蛾で、幼虫は大きくなると体長2cm、体色は大きくなるにつれて淡黄色、緑色、赤紅色の順に変化します。7〜10月に発生し、オクラ、ワタ、フヨウな

どアオイ科の植物を食害します。はじめは葉裏に薄く糸をつづって葉を食害しますが、幼虫が大きくなると葉を筒状に巻き、その中に潜んで食害します。

⑤ フタトガリコヤガを 見つけたら捕殺

成虫は前翅長18mm、黄褐色の蛾で、幼虫は大きくなると体長4cm、体色は緑色で、鮮明な黄色の条線と黒紋があります。アオイ科の植物の葉を葉脈だけ残して食害します。幼虫は6〜7月と9〜10月に発生し、葉の上をシャクトリムシのように歩行します。オクラではこの虫に対する登録薬剤はないので、葉の上にいる幼虫を捕殺してください。



ワタアブラムシ

(木村 裕 原図)



ハスモンヨトウ



オオタバコガ



ワタノメイガ



ワタノメイガ被害



フタトガリコヤガ

(木村 裕 原図)

※文中で紹介している農薬は、タキイでは取り扱いのないものもございます。ご了承ください。また、農薬をご使用の際は必ず登録の有無や使用方法をご確認ください。(編集部)

オクラは寒さに弱く、気温が低いと生育が悪く、また、肥料吸収力の強い作物です。連作を嫌い、線虫による被害が発生するので、作付け後は3年くらい間隔をあけます。土が酸性でマグネシウムが不足すると生育が悪くなるため、苦土石灰を多めに（1㎡当たり300g程度）施用します。排水の悪い圃場では、立枯病や根腐れが発生しないよう、高畝にして栽培します。病害虫では、連作による半身萎凋病やうどんこ病、アブラムシなどに注意しましょう。

病害編

注意する病気と対策

① 土面からの跳ね上げで発生する葉枯細菌病

葉縁や葉脈間に不整形で褐色の病斑ができます。土壌中に生存している細菌が、風雨や灌水で地上に跳ね上げられて感染しますが、被害が激しくなると、病斑が融合して葉が枯れ上がります。特徴は、周囲に暗褐色の明瞭な境界線のある病斑を形成し、内側は淡褐色を呈し、乾燥すると穴があくことがあります。

被害は、春先に降雨や灌水で土が上部に跳ね上げられて発生します。定植後から草丈が30cm程度になる若い作物体によく発生します。

防除対策としては、土面をマルチすることや、防除薬剤としてカスミ

ンボルドーを発病初期に散布します。

② 白い粉がふいたような症状のうどんこ病

葉の表面に薄白く粉状の病斑を生じたり、葉の表面に淡黄色の不鮮明な斑紋ができ、裏側に薄白い霜のようなかびが生じたりする症状が見られます。うどんこ病はその作物に特有ですが、本病は、ピーマンからの伝染によつて発生することが報告されているので、毎年発生する場合は、ピーマンが風下にくるような工夫も必要です。

防除には、発病初期にモレスタン水和剤、トリフミン水和剤、アミスター20フロアブルなどを散布します。

③ 半身萎凋病は連作で被害が増加

はじめ下葉の葉縁にしおれが見られ、やがて葉が葉脈を残して黄白く

黄褐色になり落葉します。被害は下葉から上位葉へ広がり、葉が次々と落葉し、先端部の葉を残すのみとなります。急速に枯死することは少なく、落葉して生育不良になります。被害株の茎を切断すると維管束部の所々が褐色に変色しています。

土壌伝染性病害で、病原菌は多犯性菌でナス科などの作物に感染します。連作によつて土壌に病原菌が残り被害が増加するため、多発圃場では土壌消毒や太陽熱消毒が必要です。

④ 根から発症する黒根病

土壌中に生息している病原菌によつて発生します。苗に発生し、根から地際部の茎を侵します。被害株は、根が黒変するのが特徴で、黒変部は根から地際部の茎にまでおよぶことがあります。病原菌は多犯性で、被害株が発生すると、病原菌の胞子は土壌中に残つて被害が伝染します。

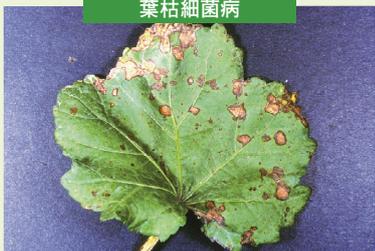
⑤ 輪紋病は若い果実の発症に注意

葉および果実に発生します。葉では、暗緑色水浸状小斑が拡大して暗褐色円形病斑を生じます。病斑の周辺部は明瞭な暗褐色、黒色を呈して、内部は淡褐色で、黒褐色の同心円状の輪紋を生じます。淡褐色病斑部分には表面に黒色小粒点（柄子殻・病原菌の伝染器官）を形成します。

若い果実が侵されやすく、果実表面に暗緑で水浸状の病斑を生じ、拡大してとり巻くようになり、その後は果実の表面に小黒点（柄子殻）を多数生じます。

オクラでは、このほか果実に発生する病害として、収穫後の果実に黒色の斑点を生じる果実黒斑病、微少な黒斑病が多数生じ、放置すると灰色のかびを生じる灰色かび病があります。

葉枯細菌病



(多賀 正節 原図)

うどんこ病



半身萎凋病



黒根病



輪紋病



(駒田 旦 原図)